

【原著】

イスマイル・カダレ『死者の軍隊の将軍』 に見る戦後アルバニア

井 浦 伊 知 郎

Sweeping Epic of Post-war Albania
meditated in Ismail Kadare's novel *The General of the Dead Army*

Ichiro Iura

0. 序

0.1. カダレと『死者の軍隊の将軍』

本論文で取り上げるのは、戦後アルバニアを代表する作家イスマイル・カダレ (Ismail Kadare 1936-) が1963年に発表した小説『死者の軍隊の将軍 (*Gjenerali i ushtrisë së vdekur*)』である。

カダレは、ギリシアに近いアルバニア南部の古都ジロカスタル (Gjirokastër) に生まれた。1958年に首都ティラナ大学の文学・歴史学科を卒業後、モスクワのゴーリキー文学研究所に留学する。ところが社会主義ブロック内でアルバニアとソ連の関係が悪化 (1961年に国交断絶) したため、他のアルバニア人留学生と共に帰国¹⁾。帰国後は国内でジャーナリストとして活動するかたわら、詩や小説を発表するようになる。

当初は『若き息吹』(1954)、『王女アルジロ』(1958)、『我が世紀』(1961) など詩人としての活動が主であった。『死者の軍隊の将軍』はカダレが公に発表した最初の散文小説²⁾ である。外国語への翻訳は、当初フランス語やブルガリア語など少数に留まっていたが、主にフランス語訳³⁾ を通じて注目されることになり、他の言語でも翻訳が相次いだ。

カダレ作品の翻訳状況について調べた文献 (Kuçuku 2006) によると、『死者の軍隊の将軍』は、アルバニア語版だけでもアルバニア本国で7回、コソヴォで5回、フランスで1回⁴⁾ 出版されている。外国語訳では、ブルガリア語、セルビア語、トルコ語、フランス語、英語、オランダ語、ギリシア語、ハンガリー語、フィンランド語、ヴェトナム語、ドイツ語、カタルーニャ語、ルーマニア語、スウェーデン語、マケドニア語、スペイン語、ポルトガル語、スロヴェニア語、クロアチア語、イタリア語、スロヴァキア語、ポーランド語、デンマーク語、ロシア語、チェコ語、中国語、韓国語、ノルウェー語の28言語に翻訳されており (初版刊行順)、その多くは1970年代から80年代にかけて出回っている⁵⁾。

『死者の軍隊の将軍』は、カダレの存在を国際的に知らしめるきっかけとなった。以来、労働党の一党独裁と社会主義のアルバニア (1944-1991) でも、複数政党制と市場経済に移行した今日のアルバニアでもその評価は変わることがなく、アルバニアを代表する国際的作家・知識人として不動の地位を占めている。2005年にはイギリス最高の文学賞「国際ブッカー賞」で初の受賞者となった。

0.2. カダレの作品世界 本論文の目的

カダレの小説世界には大きく四つの傾向が見られる。これについては既に拙稿（井浦2008）でも示しているが、本論文で『死者の軍隊の将軍』の細部を論ずるに当たり、あらためて整理しておこう。

第一に、戦後またはごく近い過去のアルバニアを扱った作品群である。例えば『死者の軍隊の将軍』は、第二次世界大戦から約20年後のアルバニアを描いている。また、戦後の新しい社会観や人間像を描いた『婚礼』（1968年）、出身地ジロカスタルを舞台とする自伝的小説『石の記録』（1971年）、その続編とも言える『或る首都の11月』（1975）、さらにモスクワ留学中に執筆された処女作『広告のない町』（1959年 ただし発表は2001年）等もここに含まれる。

第二に、第二次世界大戦後の政治情勢（1.1.にて詳述）を扱った長編群である。ソ連との国交断絶直前の世界を舞台にした『大いなる孤独の冬』（1973年）、中国とアルバニアの関係悪化を題材にした『晩冬のコンサート』（1989年）、労働党時代の政治的事件を土台とした2部作『アガメムノーンの娘』『後継者』（共に2003年 ただし執筆時期は1980年代）等がこれにあたる。特に『大いなる孤独の冬』（増補改訂の上1977年に『大いなる冬』と題して再刊）は、今のところカダレの最大長編である。ちなみにこれらの作品群では、しばしば同じ登場人物（或いはその近親者）が複数の作品にまたがって登場しており、そうした要素もカダレを読む上での（むしろ大衆小説的な）楽しみの一つである。

第三に、因習に包まれた中世以前のアルバニア社会に題材を取った作品である。『城』（1970年）、『三本柱の橋』（1978年）、『砕かれた四月』（1980年）、『誰がドルンティナを連れ戻したか』（1981年）等がこれにあたる。これらはしばしば、不可解にして不条理かつ幻想的な展開を見せ、その作風はしばしばゴーゴリやフランツ・カフカ、或いはジョージ・オーウェルと比較される。かつて在米のアルバニア人作家・文学批評家に、その作品世界を評して「アルバニアのエフトゥシェンコ」と呼ばれたこともある（Pipa 1991）。

第四に、カダレの小説には現実と異なる時間や空間を舞台としたものも少なくない。その舞台の多くはオスマン帝政期のバルカンや古代エジプト、或いはギリシアの人と神々の世界である。『恥辱の壁龕』（1978年）、『凶夢』（1991年）、『ピラミッド』（1993年）、『夢宮殿』（1995年）等が挙げられる。特にギリシア世界、わけでも古代の作家（とりわけカダレが好むアイスキュロスやホメロス）や神話伝説中の人物は頻繁に登場し、重要な役割を演じている。

その舞台となる国家や社会は、現実の全体主義体制の戯画化と見ることもできる（その点から言えば、上述の中世アルバニアをこのグループに含めることも可能である）。当然ながら、一党独裁の時代にはその公表自体がリスクを伴う行為であった。事実、1990年代の体制転換によって初めて日の目を見た作品も少なくない。だがそうした政治的背景とは別に、現実とは異なる舞台設定、時空を超える幻想的な描写によって、作品の多義的な読みが可能となり、アルバニア固有の事情に限定されない普遍的なテーマを展開させることに成功している（一部の作品は、映画化など他メディアへの展開にあたって、舞台を置き換えてもその本質を損なわなかった⁶⁾）。そのことがカダレの国際的な評価につながっているとも言える。

以上の分類はもちろん、カダレの作家活動が既に半世紀に達する現在だからこそ可能なものである。少なくとも初期の作品にこの分類を当てはめることは容易ではない。例えば、1965年に雑誌掲載されたものの、当局の発禁措置により1990年まで単行本化を許されなかった『怪物（Përbindëshi）』は、現代アルバニアを舞台としつつ、不気味な神話的・幻想的世界が（作中人物の現実を破壊せんばかりの勢いで）顔をのぞかせている。いわば、上記の要素を未分化なままに全て内包したカダレ的世界の「プロトタイプ」なのだが、それについては既に拙稿（井浦

2008)で論じた通りである。

これに比べると、『死者の軍隊の將軍』は、後述するようにエピソードの全てが現実の戦後アルバニアとヨーロッパであり、そこに神秘や幻想や虚構の立ち入る空隙はないようにも見える。実際、本作を「戦後アルバニアを知るためのガイドブック」的に読むことも可能である（だからこそ、他作品よりもはるかにスムーズに国境を越えて読まれるようになったとも言える）。だが、このデビュー作にも『怪物』と同様の「プロトタイプ」が潜んでいるのではないか。本論文は、『死者の軍隊の將軍』で描かれる戦後アルバニア社会の諸相を、作中の主要エピソードに沿って展開し、またそこに見え隠れする「カダレ的世界」の萌芽について考察する。

1. 『死者の軍隊の將軍』におけるアルバニア

1.1. その舞台と背景

カダレが生まれた当時のアルバニアは二つの世界大戦の最中だった。1912年にオスマン帝国から独立を果たしたアルバニアは、1939年にイタリアに併合され、イタリアの敗戦後はドイツ軍の侵攻を受けるといった具合で、立て続けに枢軸国の占領下に置かれた。

これに対し、アルバニア人独自の抵抗運動が各地で組織された。自由主義系の「バリ・コンバタール (Balli Kombëtar 国民戦線)」、王党派の「合法運動 (Legaliteti)」、そしてアルバニア共産党を中心とする「反ファシズム民族解放戦線 (FANÇ)」の3大勢力が拮抗した。結局、ティトー率いるユーゴスラヴィア・パルティザンの支援を受けた「反ファシズム民族解放戦線」が他の2派を排除して抵抗運動の主導権を握り、1944年11月にアルバニア全土を解放した。アルバニアは共産党（戦後は労働党と改称）の一党体制下で社会主義国として戦後復興の道を歩み始める。

それから約20年後、1960年代のアルバニアが『死者の軍隊の將軍』の舞台である。当時のアルバニアは国際的には「ソ連・東欧圏」での孤立という事態に直面していた。

解放戦争でソ連軍に依存せず、ほぼ自力で国土を解放した戦後アルバニアだが、同じ社会主義圏ということでソ連との関係は本来良好なものだった。ソ連とユーゴスラヴィアが対立した1948年の「コミンフォルム批判」でも、当時の最高指導者だったエンヴェル・ホジャ (Enver Hoxha 労働党第一書記) は党内の「親ユーゴ派」を粛清し、ソ連側につく道を選んでいる。

ところが1956年の「スターリン批判」を経て、ソ連がユーゴスラヴィアとの関係を修復する動きを見せ始めると、ホジャはソ連を非難する側にまわった。モスクワの「81ヵ国国際共産党・労働者党会議」でのホジャ対フルシチョフの激論を経て、1961年アルバニアはソ連との国交を断絶する。

既にその前後からアルバニア社会には微妙な変化が現れていた（その経緯は長編『大いなる冬』に詳しい）が、国交断絶は決定的だった。今度は労働党内の「親ソ派」が粛清された。アルバニア在住のロシア人は追放され、当時ロシアに留学していたアルバニアの知識人たちも一斉に帰国を余儀なくされた。前述の通り、他ならぬカダレもその一人である。

さらに1968年、ワルシャワ条約機構軍がチェコスロヴァキアに侵攻する（チェコ事件）と、アルバニアはこれを非難し、同機構をも脱退した。完全な「ソ連圏」からの離脱である。『死者の軍隊の將軍』は、ソ連との断絶が決定的なものとなったその時期を舞台とし、また書かれている。

なお——本作ではそこまで描かれていないが——その後アルバニアは中国との関係を深めてゆく。本家の「文化大革命」を模倣する形で1967年に国内でも急進的な「革命化」を推し進め、

軍隊の階級廃止や宗教の全面禁止などを断行したが、米中関係の回復と「文革」終結を受けて中国とも疎遠になり、やがて社会主義圏の中で全く独自の道を歩むことになる。これが、しばしば「鎖国」と呼ばれる時期であり、1991年の体制転換（複数政党制による自由選挙、信仰の自由の回復、等）まで続くことになる⁷⁾。

1.2. 作中人物 出発までの経緯

作品の題名にもある「将軍」は、国際協定にもとづき「死者の軍隊」こと戦没兵の遺骨回収のため、某国からアルバニアに派遣された。この国がどこなのかについて、実は作中では一度も明示されていない。しかし先に述べた歴史的経緯から、或いは次に述べる幾つかの点から、それがかつてアルバニアを自国に併合したイタリアを指しているのは明らかである。すなわち、将軍はアフリカ戦役を経験している（イタリアは第二次大戦中にエチオピアを併合していた）。将軍にはカトリックの司祭（軍隊での階級は大佐）が随行している。遺骨を船で移送できるほど近い距離に祖国がある（アルバニアはアドリア海を隔ててイタリアの目と鼻の先に位置している）。彼らはかつて「ファシスト」と呼ばれていたことがある。そして、かつてのイタリア国王（であり、なおかつ併合中のアルバニア国王を兼ねていた）ヴィットーリオ・エマヌエーレ三世に関する話題が出てくる、等、等、手がかりは数多く散りばめられている。

実質的な主人公はこの「将軍」と、それに随行する「司祭」の二人である。加えて、アルバニア側から派遣された専門家の「鑑定技師」、そして現地で雇い入れたアルバニア人の作業員たち（作中ではしばしば「墓堀人」と呼ばれる）が、トラックや乗用車に分乗してアルバニア各地を遺骨収集のため東奔西走する。なお、別の国から来た隻手の「中将」が発掘作業の現場や滞在先のホテルにたびたび登場する。こちらはおそらくドイツ人⁸⁾であろう。

アルバニアに向かう直前、将軍は海でささやかな休暇を過ごしていた。ところが自宅に戻ってみるとそこは陳情に押し寄せた人々で溢れ返っていた。その多くはアルバニアに出征して行方を絶った兵士の遺族であり、或いは、死亡した戦友を現地に埋葬して退却せざるを得なかった元兵士だった。

彼（彼女）らは死者の居所につながる手がかり（写真、手紙、召集令状、地図など）を手にしているが、中にはソ連で戦死した息子を探して欲しいとやってくる老母もいて、将軍を困惑させる。何の理由があるのか将軍の任務を罵りに来ただけの人物もいれば、自身の戦績をわざわざ吹聴した上、将軍の未熟さをあげつらうためだけにやってくる頑迷固陋な「元将軍」もいる。いよいよ空港へ向かうというその日の早朝には、家の門によりかかって寝ている陳情者の親子に驚かされる。そのやりとりは悲喜劇と言うしかない。有能かつ経験豊かな将軍が、まだ行ってもいないうちから「アルバニア」という未知の土地のためにひたすら翻弄されるのである。この連日連夜の奇妙な陳情風景は、後のカダレ作品に見られる「迷宮」「得体の知れない機構」と、それに巻き込まれた登場人物を連想させる。

それでも将軍は、アルバニアに向かう機中で、遺族の老婦人から告げられた詩のような言葉を思い起こし、みずからの崇高な使命をやり遂げようと誓うのだった（以下、作品からの引用は拙訳⁹⁾）。

『誇り高くそして孤独な鳥のように、あなたはあの悲劇の山々へ、その喉ぶえと鉤爪から、私たちのかわいそうな息子たちを奪い戻すために、飛んでゆかれるのです』

将軍にはもう一つ、みずからに課した任務があった。アルバニアで消息を絶った「Z大佐」（作中フルネームは最後まで明かされない）の行方を明らかにし、死亡が確認された場合は、

その遺骨を家族の元に持ち帰ることである。Z大佐はアルバニアで「青の部隊」と呼ばれて恐れられた懲罰部隊を指揮していたという。

それだけなら他の搜索と大差ない。搜索を懇願してきた大佐の妻ベティが（そばにいた将軍の妻が機嫌を損ねるほど）若く美しいことを除けば。さらに複雑なことに、その若く美しい未亡人（？）は、どうやら司祭の方とも懇意にしているらしいのだ。いざ現地で作業が始まって、作業が終わってひと息ついていても、司祭の聖職者然とした横顔をテーブル越しに見つめながら、将軍は妄想を膨らませる。

『こいつと、あの未亡人との間に一体何があったんだろうな』

司祭の横顔と、白髪が一本もないその頭髪を見ながら、将軍はそう思った。

『あんな美人をなあ！』そう思いつつ、うなじに両手をまわして、テントの傾いた辺りに視線をやった。[略]

『この司祭ときたら鋼鉄製だ』将軍は思った。

『それにしても、こいつがZ大佐の美しい奥方という時にはどれほど冷たかったのやら、知りたいものだ』

将軍は司祭から視線をはずさないままで、そんなことを考えていた。彼は、司祭が彼女の膝のかたわらで、その黒い法衣をどんな具合に脱いでいったのか、想像してみようとするのだった。実際、司祭の方が彼女に惚れ込んだのか、それとも…もし本当に二人の間に何かがあったのだとしたら…だがそれが何だというのだ、結局のところは？

崇高な使命感と、下世話な好奇心がないまぜになった感情は、後述する「或る破局」の瞬間まで、将軍の心に巣食い続ける。

1.3. 困惑と徒労

将軍と司祭が着いたアルバニアの首都ティラナは、秋の冷たい雨に包まれていた。一般にアルバニアの秋冬は天候が不順なのだが、それは彼らの作業計画にも大きな影響を与えた。山地の移動は困難を極める。濃厚な霧が視界を塞ぎ、ぬかるみが行く手を遮り、湿って重くなった土はシャベルの動きを鈍らせる。地上に現れる骨はさながら「巨大爬虫類の骨格」「カルシウムの王国」である。さらに、掘り出された骨に付着した破傷風菌に感染する恐怖が常につきまとう。

朝から晩まで骨の形や大きさの鑑定にてこずっていた将軍は、そのうちホテルのラウンジに居合わせるアルバニア人たちの頭蓋骨が透けて見え、寝室のブラインド越しに差し込む車のライトがレントゲン撮影の像に思えてくる。

サロンは、いつもと変わらず静かだった。ただ彼らから離れた隅の方に、若者たちが数人、何か話しながら時折笑い声をあげていた。二人には彼らの背中しか見えなかった。その向こうには、婚約者同士と思しき男女の二組が座っていた。その二人は、話している間もお互い見つめ合っていた。男の方は綺麗な頭の形をしていて、引っ込んだ広い額で、下顎の幅が広がった。アルプス型¹⁰⁾ だな、と将軍は思った。

カウンターの向こう側にはウェ이터が座っていた。その丸みを帯びた頭は、オレンジの載った二枚の皿の間で、完全に静止しているように見えた。

痩せた小柄な男が一人、カバンを手に入ってくると、ラジオのそばのテーブルに腰かけた[略]

ウェ이터がコーヒーの仕度をする間、その痩せた男はカバンから厚いノートを取り出すと、何か書き始めた。男は顎の幅が狭く、頬骨はほとんど全く見えなかった。タバコを吸うと、頬に二つのくぼみが出来て、顎の形がはっきりと見えた。

「ああ、そうなのか、これがアルバニア人なのか！」

〔略〕 そうだ、この頃自分に妙なことが起こるのだ。人を見た途端、不意にたちまちその髪の毛が、続いて頬やその肉や目や、その他の不要なもの、というよりむしろ自分にとってはその核心に入り込むのに支障となるものの全てが抜け落ちていって、それらがなくなって頭蓋骨と歯（それらだけが表面に残ったものだ）だけになったその人物を、思い浮かべてしまうのだ。

將軍は、壁の表面に、時折通りを走る車のライトが映るのを見つめていた。その光は半分だけ下ろされたブラインド越しに縞模様になって差し込んでいて、それが將軍にはまるでレントゲンの機械を通してもののように思われた。見知らぬ人々がレントゲン撮影を受けては、次の人に場所を空けて立ち去っていくようだった。

行く手をはばむのは泥だけではなかった。そもそも、事前の情報通りに遺骨が見つからない。有力な証言者の証言はしばしば事実と食い違う。地震で地盤が移動してしまったような場所や、先に誰かが骨を掘り出してしまった場所（実は中將らの一行が犯人）で、將軍は立ち尽くし、苛立ちを周囲にぶつける。何より気になるのは、夜になると得体の知れない歌を延々と唄い続け、勤勉だが、時に不可解な態度を見せるアルバニア人の作業員たちだった。国のあちこちに設営された無人の塹壕（トーチカ）¹¹⁾の銃眼さえ、將軍は警戒して通り過ぎようとする。城こそないが、まさしく全土が不条理の迷宮である。

そう、將軍は疲れきっていた。あの困難な道のりの何もかもに、あのぬかるんだ、あちらこちらでかたまりになって、或いはばらばらに散らばっている墓地の何もかもに、あのうんざりするような泥土の何もかもに、あの半ば壊れかけた塹壕の何もかもに（その塹壕にしても、兵士らと同じように、骨だけになって放り出されているのだ）。それから、他国の兵士らの墓をめぐるいざこざや、記録報告や、どうでもいい雑文の類や、地元当局との際限ない往復にもだ。どうしてこう何もかもが混ぜこぜなのか。わけでも厄介だったのは、ばらばらになっている兵士の遺体を識別することだった。証人たちの間でしばしば意見が対立した。老人たちは、様々な事件や戦闘を取り違えた。正確なことは何ひとつなかった。真実を知っているのは泥だけだ。

しばしば將軍は、自分と司祭が今なお「敵国人」として見られているのではないかという思いに襲われる。自分たちを見つめるアルバニア人たちの視線には、時に敵意らしきものが認められるものの、作中でその真偽が明らかにされるわけではない（単なる外国人への好奇心という可能性もあるのだが）。

村人らは立ち止まって外国人たちを見つめていた。何のためにやってきたのか、彼らにはわかっているようだった。それは彼らの表情からはっきり読み取れた。住民らの瞳の奥の冷たい表情が、將軍にはよくわかっていた。自分たちの存在が、占領時代を思い出させるのだろうな。彼はそう思った。そして、あちこちの地域での戦いが激烈なものであればあったほど、彼らの表情も敵意に満ちたものになってくるのだ。

きっと俺のことを憎んでいる。あの墓堀人の目の中には憎悪が見えた。そしてそこには何の変化もなかった。こんな作業で結びついている我々は、死を賭した二つの敵同士だ。まるで、同じくびきにつながれた、二頭の雄牛のように。黒い一頭と、そしてもう一頭の黒。一頭の喜びは、もう一頭の悲しみ〔略〕

奇妙なことだが、アルバニア人カダレによるこの作品の中で、アルバニア人の思いや主張が直接示されている箇所は非常に少ない。その多くは、あくまでも「異邦人」である將軍の主観という、いささか歪んだレンズを通して描き出されるだけである。アルバニア人が將軍に直接心情を訴える場面も（後述の「或る事件」を除けば）ほとんどない。しかも將軍自身はアルバニア語を一語も解さない。

将軍は、サロンの大きなラジオに耳を傾けた。アルバニア語は難しく聞こえた。埋葬地に手伝いに集まってきたアルバニア人の村人たちが喋っているのを耳にしたことが、幾度かあった。死者も皆きつと、この死に至る言語を聴いていたのだろうな。将軍はそう思った。今はどうやらニュースをやっているようだった。というのも、女性のアナウンサーがテル・アヴィヴ、ボン、ラオスといった、耳慣れた言葉を繰り返していたからだ。

〔略〕将軍は教会の前のバス停でバスを待った。バスに乗り込むと、後方の窓際に立った。「切符をお求めください」切符売りの女性が言った。

将軍は『切符』という言葉だけは聞き取れた。それで思い出してカバンの中を探ると、百レク紙幣を取り出した。

「小銭ありません？」彼女が言った。

将軍は質問の意味がわかったので、否定のつもりで首を振った。

「3レクですよ」彼女はそう言って指を3本突き出した。「小銭で3レク、ないの？」

「ねえちょっと、その人、外国人だよ」背の高い少年がゆっくりした口調で言った。

「だと思ったわ」そう言って彼女は釣り銭を両替し始めた。

「アメリカ帰りのアルバニア人だな」座っていた老人が言った。「アルバニア語をまるっきり忘れちゃう連中だっているさ」

「違うよおじいちゃん、外国人だよ」少年がまたゆっくりと言った。

「よくお聞き、お前や」老人は言った。「わしはな、こういうことには詳しいんだ」

将軍は、二人が自分について話しているということにも、自分がアメリカ人と間違われているということにも気付いていた。その二人は将軍の鼻先で熱く議論していたが、将軍を指さしながらも、彼自身の存在にはまるでお構いなしだった。

何てことだ、自分が影だったとしても、もっと注意を払ってもらえるだろうにな。将軍はそう思った。すると不意に、自分と彼らが二つの異なる世界に分かれていて、互いに触れることもできなければ、見聞きすることもできないのではないかという気持ちになって、背筋が寒くなった。

唯一、将軍や司祭の通訳係も務める鑑定技師が、外部との正確なチャンネルの役割を果たしていると言えなくもないのだが、その技師でさえ、常に中立的な存在ではない。例えば、或る墓地の壁に旧占領軍を揶揄した落書が発見された時のこと。外交問題だと居丈高になる将軍に対し、技師は（見方によっては極めてイデオロギー的な）「アルバニア人民の立場」をはっきりと言い放つのであった。

「どういうことだこれは？」

将軍は大声で叫ぶと、壁を指さした。壁には炭のかけらを使って、ゆがんだ大きな文字でこう書かれていた：『敵どもはこういう報いを受ける』

技師は肩をそびやかして

「誰かが今日の午後に書いたのでしょうか」と言った。「朝はありませんでしたからね」

「そんなことはわかってる」将軍は言った。

「我々が知りたいのは、誰が、何の目的でこんな…攻撃を行ったのかということだけだ。これは恥ずべきことだぞ、こんな…」

「何も恥ずかしいことなんかありませんよ」アルバニア人の技師が冷静に答えた。

司祭は手帳を取り出して、そこに書かれている文句を書きとめていた。

「恥ずかしいことなんか何だとは何だ？」将軍は叫んだ。「戦争で死んだ者たちの墓地の壁に、こんな言葉を書くなんて。私はこれを問題にするぞ。これは重大な傷害行為だ。陵辱行為だ」すると技師はきつと振り向いた。

「20年前、くびり殺した私たちの同志の胸にファシズムのスローガンを刻み込んだあなた方が、今になって、どこかの子供が書いたに決まっているような、何でもない落書きにいきり立っているのですか！」

こうした緊張感是将軍たち一行の関係にしばしば微妙な影を落とすのだが、それでも作業はどうか進められていった。だがそれが大きく揺らぎ、綻びを見せるような事件も何度か起き

ている。次の章では、そうした三つの出来事を取り上げる。

2. 将軍たちをめぐる「事件」

2.1. 司祭の「学説」

アルバニアは全く初めてだという将軍¹²⁾ に対し、司祭はかつて占領下のアルバニアに従軍した経験の持ち主らしく（明言されてはいないが）アルバニア語も多少理解できる。そのせいか、彼はアルバニア人とアルバニア文化に対して大いに研究を重ねており、折に触れてみずからの「学説」を将軍に披露する。

例えば、司祭曰く、戦争に対するアルバニア人の感覚は他の民族とは著しく異なっており、甚だ危険なものであると。

「アルバニア人というのは、粗暴で後進的な民族ですよ。彼らは生まれたばかりの頃から、揺りかごに銃を置いてもらっていて、だからこそ銃は彼らの生活に欠くことのできない部分になっているのです」

「そんなものかも知れんね」将軍は言った。「だから雨傘を、まるで銃みたいに持っているわけだ」

「子供の時分から生活の一部になっているからこそ」司祭は続けた。「銃はアルバニア人の生活の根幹のようなものであって、アルバニア人気質の形成に直接に影響しているのです」

「ほう、そうかね」

「ですが、人が全身全霊をかけて愛し、崇拝するものであれば、当然のことながら、それを使ってみたいという欲求にも駆られるものです。ところで、他のものと比べて、銃はどんな風に便利でしょうね？」

「そりゃ決まってる、人を殺すためさ」将軍は答えた。

「その通りです。アルバニア人はいつだって、殺し、殺されたいと望んでいるんですよ。彼らは殺し合いますが、戦う相手が誰であるかはどうでもいいのです。彼らの血の復讐について、お聞きになったことは？」

「あるよ」

「彼らは戦いの中で、いにしえのものを呼び覚まされるのです。これは、彼らの性質の中に刻まれた必然なのです。平時にはのんびりと、まるで冬の最中の蛇のように惰眠をむさぼっていますが、戦いになって初めて完全な自分をさらけ出すことができるのですよ」

将軍はうなずいた。

「戦争は、この土地では当たり前の出来事です。だから彼らは戦いの中では獐猛で、危険で、必要以上の被害をもたらすのです」

「つまりこの民族は、そういう、破滅というか自己破滅への欲望に駆られて、滅びることを運命付けられているというのかね」将軍は訊ねた。

「もちろんです」

「それは、アルバニア人がもともとどの性分で戦争を欲していたからですよ」司祭が言った。

「彼らは戦争を、余りにも情熱を込めて、また当然のものとして抱き締めるものだから、まったく間にその血は戦争に毒されてしまうのです。アルコール中毒になる人間のようにね。彼らの精神は…」[略]

「それは、現代では生まれることのないものです。アルバニア人は、彼らのあらゆる歴史を通して、鉄器を手には歩き回ってきました。家父長的な山岳住人たちは、つい昨日まで中世時代のような生活を送っていましたが、常にその腕には最も近代的な武器が握られていたのです。逆のことを考えてみてください。前にも一度申し上げましたが、もし戦争もなく、武器もないとしたら、この民族は衰退し、徐々にその根も枯れてゆくでしょう」

また曰く、アルバニア人の戦争観は、その歌にもあらわれていると。

「彼らは飲むと、習慣として歴史を歌いだすものなんですよ」司祭が言った。

「彼らの中で最年長の者が、戦争中の出来事を語って聞かせるのです」

「パルティザンだったのかね？」

「ええ、そのようです」

「だったらこの仕事は、その戦時中の歳月のことを呼び醒ますことになるな」

「確かに」司祭は言った。「だからこの歌は、彼にとっては、今この時にこそ、魂が求めるものなのです。あの老いた兵士にとって見れば、かつての敵どもが墓から掘り起こされること以上に大きな見返りなどないでしょう？まさしくこれは、戦争の続きなのです」[略]

さらに曰く、アルバニア人はとても国際情勢に関心を持っている。なぜなら国際的に孤立してしまったからだ。

「アルバニア人というのは、よく新聞を読む民族だな」将軍が言った。

司祭が彼のところに近づいてきた。

「そうなるのは、彼らが政治に強い関心を持っているからです。ソヴィエト連邦との対立後、彼らはヨーロッパの中で完全に孤立してしまいましたから」

「相変わらずだな」

「今や彼らは封鎖状態です」

「こんなちっぽけな、貧しい国が封鎖状態とは…驚きだよ！」

「これに立ち向かうのは全く容易なことではありません」

「何という民族だ！」将軍は言った。「だが、ひょっとするとこんな民族というのは、傷の痛みよりもむしろ、美しいものにずっと弱いのではないかな」

加えて、そうしたアルバニア人の感覚は解放後の今日も変わっておらず、敵に対する憎しみは決して消えることがないという。発掘作業人の追加募集に地元住民が集まるだろうかと不安をうったえる将軍に、司祭はこう告げる。

「[略] たぶんこういう作業に、彼らは密かな満足を得るものですからね」

「そうは思わないな」と将軍は言った。「誰が墓場に満足なんて感じるものかね？」

「連中にとっちゃ、これは或る意味で、遅ればせの復讐なんですよ」

こうした司祭の「学説」は、もちろん（当時の西欧世界にありがちな）誤解や偏見に満ちている。だがカダレは、こうした外国人の「通」ぶった長口上をすぐさま作中人物の誰かに修正させるような、見えすいた手順はとっていない。なぜなら、余りにも露骨であるが故に（アルバニアに不案内な将軍でさえも辟易している）読み手はその不自然さにおのずと気付くからだ。唯一、司祭に面と向かって抗議したのは、前節でも取り上げたアルバニア人の鑑定技師である。

アルバニア人の技師は微笑んだ。

「今、復讐について話を聞いていたところさ」将軍が言った。「民族心理の観点から見て、実に面白い」

「私はそうは思いませんね」技師は言った。「復讐でアルバニア人の心理が説明できると思う外国人は時々いますが、失礼ながらそんなものは、ただのたわごとですよ」

「そうかね？」と司祭が言った。

「復讐の問題にやたらと執心なさる外国人もいますね。それも何かしら理由あつてのことです」

「これは、学問的な興味を引く問題だよ」司祭は言った。

「そうは思いませんね。真の目的は、アルバニア民族を根絶やしにするための思想的準備でしょう」

「おいおい、そりゃ違う、違うよ」司祭はこわばった笑みを浮かべながら言った。

技師は二人としばらく並んで歩いていたが、そのうち挨拶して立ち去った。

この技師は作中一貫して冷静沈着な人物として描かれているためか、稀に見せるこうしたささやかな怒りが、読み手の印象に強く残るのである。

2.2. 作業員の死

戦後アルバニアの比較的安定した社会を舞台とするこの作品では、現在の登場人物の生死が問題になることはほとんどない。基本的に将軍らを悩ませるのは、過去の「死者」とそれにまつわる事象である。例えば居所不明の地下から呪詛の声をあげる（ように思われる）白骨や、その発掘に関する電報や報告書といったこまごました紙類や、遺骨の棺を預かる小屋の管理人¹³⁾の不気味な振る舞いや、そもそも異国の大地で今や静かに眠る魂を掘り起こすという作業自体への素朴な疑問や、身元不明の遺骨と共に残された日記帳の断片や、地元イエズス会¹⁴⁾の修道士が語った英雄¹⁵⁾の壮絶な最後や、占領軍によって開設された娼館でアルバニア人に殺された外国の娼婦¹⁶⁾ などである。

だがそんな本作の中盤で、一人の人物の急死が大きくクローズアップされる。或る晩、発掘作業に当たっていたアルバニア人の中で、最も経験のある年長の作業員¹⁷⁾の具合が悪くなった。夜が更けて容態は急激に悪化し、病院に運ばれるも未明に息を引き取ってしまう。原因は、発掘時に素手で触れた軍用マントの錆びたボタン（或いは折れた遺骨の破片）だった。指先の傷口から細菌に感染してしまったのである。アルバニア人の技師と運転手が車で山を下りていった後、将軍と司祭は野営用テントの入口でこんなやりとりを交わしている。

「20年も微生物は土の中に潜んでいて、不意に飛び出してくるんだからな。恐ろしいよ」将軍は言った。

「そうですね」司祭が言った。「空気と日光に触れた途端、繁殖するんですからね」

「まるで冬眠から目覚めた野獣だな」

司祭はゆっくりとコーヒーを飲んでいた。[略]

「万一の時には、彼の家族に金を払わなければなるまい」将軍が言った。

「生涯年金ですか？」

「ああ。協定文書にそう書いてあった。たぶん4条11項だったと思う」

司祭はテントの方へ行だったが、ノートの束を抱えて戻ってきた。

「確かに」彼は言った。「4条、11項。不幸にして障害を負った場合の補償は、生涯に及ぶものとする」

「きっと治るさ」将軍は言った。「神の恵みがあらんことを」

一方、病院から仲間の死を知らせに戻ってきたアルバニア人の技師と運転手を囲んで、作業員たちはこんな風に語っている。それは将軍たちの心配事とはおよそ対照的な、心から故人（実は元パルティザンであることがこの会話で判明する）を偲ぶやりとりだった。

「信じられないな」誰かが言った。「あいつは生きていたのに、今はもういないなんて」

「ジョレカは逝ってしまった。誰にも知られず逝ってしまった」

「いい奴だった」また誰かが言った。「素朴で、愛される奴だった」

「誰があいつの奥さんに伝えてやるんだい？」

「ああ、それがあったな」

「あの気の毒な奥さんは、この仕事を気に入っていなかった。何か嫌な予感がするみたいだったよ。『いつになったらその墓掘りは片づくのかしら？』なんていつも手紙に書いてあったな。そうするとジョレカはこう返していたよ、『あと少しでおしまいさ』ってね」

「あの奥さんも気の毒になあ」運転手が言った。「俺が手紙を渡しに行った時も、しきりに嘆いて、こぼしていたよ。ずっと気に病んでいた。戦争の時だって何年も待ち続けたと思ったら、今度はまた山に行ってしまったんだからなあ」

「あいつはよく、半分笑いながらこう言っていたものさ。『生きているファシストどもを相手

にして、今もまたあいつらを相手にしているんだからな』

「そうだ、何年も奴らと戦って痛めつけたのに、最後の最後に奴らにやられてしまうなんて、ひどい話だよなあ！」

「奴らジョレカに復讐したんだ、確かに」

「20年も経って復讐したんだ。ジョレカは弾丸で奴らを殺したが、奴らはボタンで背後から殺したんだ」

「敵は敵のままなんだな、たとえ死んでいても」

「そうとも」

「向こうに黒い鳥みたいにじっとして、ものも言わないでいるぞ」と運転手が小声で、憎しみに満ちた視線を司祭と将軍に向けながら言った。その二人は橋の残骸のそばに、大きな軍用マントをまとして立っていた。「さあ、今は満足だろうな、なあ？」

「しっ！」と誰かが言った。「馬鹿なことを言うな、リロ！」¹⁸⁾

小屋には再び重苦しい静寂が訪れた。時折、風が吹き抜けて、破れたタール紙をはためかせた。

「俺たちのジョレカを殺しやがった」一人が悲しげな声で言った。「俺たちからジョレカを奪っていきやがった」

このくだりは「敵は敵のまま」など、或る種の政治的プロパガンダに利用されてもおかしくない要素を含んでいる（事実、労働党時代にはそういった文脈で有名になった箇所でもある）が、決してそれだけではなく、小説としての構成そのものが非常に巧みな箇所でもある。

ここでは、アルバニア人作業員たちのやりとりが読み手の眼前に展開されている。そして、そこに集うアルバニア側の登場人物たちが肉声で語り合いながら、将軍と司祭という「元敵国人」二人の不可解な（何しろ作業員たちには将軍たちの母語がわからない）やりとりを、遙か遠方に付む「黒い鳥みたい」だと眺めつつ、あれこれ憶測を巡らせるという構図が取られている。カダレは本作でこうした視点の切り替えをたびたび行っているが、ここはそれが非常に明瞭に、あたかも映画のカメラの切り替えのように効果的に行われている箇所の一つである。

2.3. 婚礼の夜

おそらく本作で最も重要な箇所、「破局」と言っても差し支えないような事件が、後半で描かれる婚礼での出来事である。

次々降りかかる不測の事態に日程を大幅に狂わされながらも、将軍らの一行はどうか予定していた遺骨の大半を発掘し、祖国への移送に向けた整理作業に取りかかる。しかし（将軍にとって）肝腎のZ大佐の遺骨はいまだ見つからず、その消息も杳として知れない。身元不明の遺骨と共に見つかった日記帳¹⁹⁾には持ち主の身長以外に何の個人情報も書かれておらず、その身長がZ大佐と同じであったことから将軍たちを一時慌てさせるものの、日記の持ち主が他ならぬZ大佐と「青の部隊」の存在を恐れていることから、単なる「センチな臆病者」の脱走兵だったのだらうという推理²⁰⁾でひとまず決着する。

結局、Z大佐を筆頭に40人ほどが行方不明のまま、発掘作業は予定の最終日を迎えた。ティラナに戻る前夜、将軍たちは或る溪谷の村に宿泊する。実はそこはZ大佐に関連のある村だったのだが、将軍にとってもはやそれは大した問題ではなかった。

〔略〕今夜はここに泊まって、明日の朝にはティラナに出発しよう。それから数日すれば祖国だ。ためらいつつ湧き上がってくる喜びを、将軍はどうか抑えようとしていた。

「この村でZ大佐が消息を絶った可能性があります」司祭が、記録の載ったノートをめくりながらそう言った。〔略〕

「正直に言うと、今夜はそのことは考えたくないよ」将軍はのんびりした口調で言った。「ゼンたい今夜は、探しごとには関わりたくないんだ。私に言わせればだよ、有り難くもこれま

での苦難の全てがようやく終わったというのに、君はまだ私に何かおつかぶせようというんだな」

「これは私たちに与えられた任務ですよ」司祭は言った。

「わかってる、わかっているさ。だが今はそういうことは考える気になれないんだ。今夜は素敵な夜だというのに、君には呆れるよ。今夜はお祝いだ。もうゆっくりしたいよ。温かい湯を張った風呂に入りたいよ。ああ、それが今夜一番やりたいと夢見ていることさ。風呂のためなら軍隊の半分…王国の半分くれてやるさ」そう言って將軍は笑った。

ちなみに將軍は、「苦難」にあたる語でラテン語の「カルヴァリ」、すなわち「ゴルゴタ」の名を口にしている。まさしく彼は「苦行の終わり」を実感していた。かつてアルバニアへ向かう機中でみずからを鼓舞したはなむけの言葉「誇り高くそして孤独な鳥のように」云々も、ほとんど忘れかけていた。村の一軒家から流れてくる婚礼の音楽を耳にした將軍は、自分たちも参加しようと言い出し、司祭が止めるのも聞かず（半ば強引に連れ出して）婚礼の行われている家へと向かう。

二人は門の前でしばらく立ち止まった。玄関口では着飾った若い男たちが、タバコを吸いながら小声で会話していた。それから二人は中に入った。將軍が先頭に立ち、司祭が後に続いた。屋内は大騒ぎする女子供で溢れかえっていた。ドラムの音がやむと、奥の方から男たちの声が聞こえてきた。廊下はちょっとした騒ぎになった。誰かの知らせを受けて、年配の男が一人、驚いた顔で將軍たちのところへ飛んできた。彼は二人の手を取って心のこもった挨拶をすると、コートを脱ぐのを手伝い、それを村人たちの着ていたマントの横に掛けた。二人が家の主人の案内で大広間に入ると、居合わせた一同は沸き立ち、口々にささやき合い、前に乗り出してきた。まるで色とりどりの木や花に溢れた林が、不意の強風にあおられた時のようだった。

ちなみに、アルバニアに限らずバルカンの結婚式は比較的オープンで、特に農村部の婚礼は誰でも出席することができる。わけでも外国人の滞在者は「遠方からの客人」として非常に歓待される傾向がある²¹⁾。ここに登場する家の主人は、そうしたアルバニア人特有のホスピタリティを象徴する人物として描かれており、次に述べる「事件」の後も、なお二人を熱心に引き留め、酒や料理を勧めるのであった。

ともあれ、客たちの歓迎心と好奇心の入り混じった視線の中で、將軍と司祭は席に無事着いたのだが、その様子をじっと見つめる、憎悪に満ちた何ものかの目があることには全く気付いていなかった。作中ではその謎の人物の心の声が、婚礼の情景の合間合間にイタリックで割り込む構成²²⁾ になっている。

あんたは自分でも余計ものだとわかっているんだね。この婚礼であんたを呪っている者がいることを、あんたは勘づいている。母親の呪いは消え去りはしないのだから。みんながあんたを敬っていても、あんたは自分がここに来るべきじゃなかったとわかっている。わかっていてそれを押し隠そうとしているけれど、どうしたって隠せるものじゃない。[略]

[略] あんたは、自分の軍隊を連れてあたしたちのところになだれ込んできて、あたしたちを燃やし、焼き、殺す日のことを考えているんだろう、あんたの仲間たちがそうしたように。あんたはこんな婚礼に来るべきじゃなかった。この婚礼に出かける時、あんたの膝は震えていたはずだ。せめてあたしのために、この耄碌した、不幸な年寄りのための思えばこそだよ。それがどうだい？あんた踊るのかい？あんたは踊りに出ようっていう気なのかい？何をにやにやしてるんだい？あれまあ立ち上がったよ！みんな、そいつを歓迎するつもりかい？やめておくれよ！ここで何をしようってんだい！そんなのあんまりじゃないか！この罰当たり！

音楽に合わせていそいそとダンスの輪に加わろうとした將軍に、一人の老婆が詰め寄り、何

ごとかを叫び、即座に走り去った。アルバニア語がわからず困惑する将軍に、村人が（司祭を通じて）語ったのは、20年前の驚くべき真相だった。

【略】あのニツァ婆さんというのは毫碌した気の毒な女だが、それというのもZ大佐の懲罰部隊が彼女の夫を縛り首にしてしまったからなのだという。さらに【略】大佐は彼女の娘を自分のテントへ連れて行ったのだが、その14歳の娘は早朝に戻ってくるなり井戸に身を投げたのだという。

まさにその次の晩、大佐は姿を消した。人々の話では、大佐はその娘が死んだとはつゆ知らず、その夜もニツァの家に再び出向いたらしい。彼は警護兵を外に待たせておいた。時間が経ち、戻らなければならない時間をとくに過ぎていたが、警備兵は夜明けまで待つように命じられていた。朝になってみると家には誰もおらず、Z大佐がどこへ行ったのか、気づいた者もいなかった。彼は緊急にティラナに呼び戻されたのだと言う者もあれば、他の説を唱える者もあったが、部隊の士官たちは沈黙を通していた。部隊はその翌日、その地をあとにした。

自分の気まぐれを後悔した将軍は、そそくさとその場から退散しようとする。ところがその前に再び老婆が現れ、Z大佐の骨（それは彼女の家の敷居の下に埋めてあった）を詰めた袋を放り投げた。

【略】もはや通訳など必要もなかった。何もかもが明らかになった。将軍は、ニツァ婆さんから袋へ視線を移した。けたたましい音を立てて床に落とされた、ところどころ黒い土がこびりついたその袋ほどに恐ろしいものなど、あろうはずもなかった。若い女たちは怯えて目をそらし、手で顔を覆っていた。老いた女たちは十字を切り、恐ろしげに何かつぶやいていた。

その夜、遺骨の袋を抱えてほうほうの体で宿に辿り着いた将軍だったが、あれほど楽しげだった婚礼の音楽が自分を襲撃しに来るように思えて耐え切れず、夜も明けぬうちから司祭と運転手を叩き起こし、車でティラナへと出発する。そして、途中エンストで止まった川のそばで、将軍は遂に「キレル」。

この袋だ。将軍は急に思った。この袋が俺たちを悩ませるんだ。今までは何もかもうまく行っていたのに、このどす黒く呪われた袋が出てきてから、何もかもが裏目に出始めた。

「この袋のせいだ！」将軍は大声を上げた。

「どうしたんです？」司祭が問いかけた。

「この袋が災いを連れて来ると言っただ」将軍はまた叫ぶと、次の瞬間、つま先で袋を蹴り上げた。袋は大きな音を立てて川べりを転がり落ちていった。

「何てことをするんです！」司祭は叫ぶと、慌てて車から出てきた。

「あの袋こそ災いのしるしだ」将軍はそう言って、深いため息をついた。

この事件で将軍と司祭の間に決定的な亀裂が生じたのか、これ以降、結末に至るまで二人が顔を合わせる場面はない。かつて祖国で誓った崇高な任務への情熱は、もはや将軍には残されていなかった。あるのはただ、自分を包囲する得体の知れないものに対する恐怖、そして失望感と、言いようのない徒労感ばかり。

「我々は兵士の棺と共に彼らの中を歩くことで、我らの死さえも、彼ら【訳注；アルバニア人】の生よりは美しいのだということを示すつもりだった。そうだ、あの時はそんな風に思っていたのだ。ところがここに来てみたら、話はまるで違っていった。【略】最初に誇らしい気持ちだが、それから重々しい陰影が、そして想像していたものの全てが消えてしまった。そして今の我々はこうやって、完全な無関心の中で、みじめな戦争の道化者二人になっている。この土地で戦って斃れたみんなよりも、ずっと不幸じゃないか。違うかね？」

帰国前夜、将軍はティラナのホテルで「中将」と飲み明かした挙げ句、Z大佐の遺族から立て続けに届いた「知ラセエウ」の電報を、くしゃくしゃに丸めて窓から放り捨てるのだった。自分が袋ごと放り捨てた大佐の遺骨のように。

3. 掘り起こされたもの

序論でも述べたように、『死せる軍隊の将軍』は、イスマイル・カダレという若き才能（発表時27歳、フランス語訳刊行時34歳）の存在を一躍世界に知らしめた。当時の海外書評には、「鉄のカーテン」の向こう側の、とりわけ強固な独裁体制下²³⁾で、かくも普遍的な価値を持つ文学作品が生まれていたことに対する「驚き」に近い反応が多く見られる（もっとも、独裁体制下の社会にまともな文学などあり得ない、といった態度自体、人間が持つ不屈の想像力というものを認められない浅薄な考え方なのだが）。

それだけではない。本作品は、アルバニアという「謎の国」そのものに対する西欧世界の注目を呼び起こすことに大きく貢献した。それは、この作品が解放後20年のアルバニアの姿をリアルに（それこそ当時の「社会主義リアリズム」を標榜する党人作家たちからも認められるほどの水準で）描いているからに他ならない。

ところが作品を仔細に検討してみると、実はその内容のほとんどが、外国人である「将軍」の目を通して描写されたものであることに気付く（2.2. で取り上げたアルバニア人作業員同士の会話は、実はむしろ珍しいパターン）。前章で述べた通り、彼はアルバニア事情には全く不案内であり、随行する司祭の怪しげな「アルバニア人とは」論に振り回されている。そして自分の眼前で起こる出来事については、しばしば——愚かを通り越して滑稽なまでに——その意味を正確に理解してすらいない。

だがそうした間接的描写がむしろ、アルバニア人みずからに饒舌に語らせるのとは違った意味で、現実のアルバニアの姿を浮き彫りにしている（そもそも、病死した作業員や婚礼の家の主人の例でも明らかなのだが、作中に登場するアルバニア人の多くは、たとえ母語であっても雄弁に何かを語るようなタイプではない）。もちろんそこには外国人特有の無知や誤解や偏見が含まれているのだが、それを敢えて剔別してみせることで、そんなステレオタイプなアルバニア人像さえも相対化させることに成功している。

なぜなら、一見、将軍の目を通して映し出されているように思われる世界の外には——折々に挟まれる死者たちの言葉（脱走兵の日記、話者不明の独言など）も含めて——常にカダレ自身の視点が効いているからである。それは前章で述べた通り、あたかもカメラのズームやフォーカスを操作するように、時間と空間を自在に行き来している。結果、読み手の眼前には起伏に富んだアルバニアの風景と共に、そこに生きる人々や、既に世を去った人々、或いはその狭間で右往左往する来訪者たちの姿がゆらゆらと立ち現れてくるのである。しかもそこには常に、控え目な諧謔味が添えられている。カダレのこうしたテクニクは、続いて書かれた初期の異色作『怪物』で遺憾なく発揮され、さらに一連の長編作品群で成熟を見せることになる。

最後に、この代表作にも既にちらほら姿を見させているカダレ的アイテムの幾つかを挙げておこう。まず、ごく僅かながら将軍が古代ギリシアに言及しているくだりがある。

将軍は偉大な文明国を代表しており、それゆえその仕事もまた偉大なものとなるはずなのだ。その仕事にはどこかしらギリシア人やトロイア人の偉大さが、また何かしらホメーロスの埋葬の形式が含まれているのだった。

残念ながらこうした高揚感はすぐさま濃霧と泥まみれにされるのだが。この他、後に『誰がドルンティナを連れ戻したか』で描かれる「肉親の約束を守るため墓からよみがえる死者」の伝説も、別の外国人の口を通して語られている。

まるで学校で習ったドイツのバラッドの英雄のようですわ、名前は思い出せないのですけれど。まさしくあの英雄よ、墓場から起き上がり、馬に乗って月の光の下を駆ける、あの英雄ですよ。

得体の知れないものに絶えず追い立てられる不安、或いは「迷宮」の存在については既に述べた通り（1.2. および1.3.）だが、ここでは別の箇所からも引用しておこう。仕事終わりの酒の席で、将軍と中將が互いの見た不思議な夢を物語る場面がある。

「自分がスタジアムにいて、墓掘りが続いているようなんだが」中將は話を続けた。「ただそのスタジアムはずっと大きいような気がするし、客席は人でいっぱいなんだ。[略] 我々が墓を開くたびに群集から喝采が湧き起こり、スタジアムじゅうが立ち上がって、大声で兵士の名を叫んでいる。私は何とかその名を聞こうとするんだが、群集の声は雷鳴のようにがんがん鳴り響いていて、一言も聞き取れない [略]」

将軍は[略] 夢の中でもっと歳をとって、『兄弟たちの墓』の見張りをつとめている。そこはまさしく、彼がアルバニアで収集してきた遺骨が埋葬し直されている場所なのだ。その墓地は広大で、どこまでも果てなく、墓の間の通路を何千という人々が、奇妙な電報を手に、自分らの親族を探し求めて行ったり来たりしているのだった。だがどうも探している人物の墓を見つけられないらしく、すると脅すように首を振り始める。そしてその場に居合わせた者たちが幾千人、また幾千人とそれをやり始め、彼は大きな恐怖に見舞われる。だがちょうどその時に司祭が呼び鈴を鳴らすと、全てはかき消え、将軍は目覚めるのだった。

そして二人は、自分たちの任務が「戦争の焼き直しみたいなもの」だという認識で一致する。果たして彼らは今度こそ²⁴⁾ 戦争に勝ったのか？彼らが掘り出してしまったもの、持ち帰らざるを得なかったものは一体どれほどの重荷だったのか？だが、アルバニア人を主役に据えた他のカダレ作品とは異なり、祖国に戻った外国軍人たちの「その後」が描かれることは遂にないのである。

付

本稿は、2008－2009年度大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学 国際研究教育拠点」研究プロジェクト「ヨーロッパ／非ヨーロッパ－東欧の現代文学」による研究成果の一部である。

注

- 1) 戦後アルバニア史、特に政治史については、現地歴史教科書の記述に関する拙稿（井浦2006, 2007）、および拙著（井浦2009）参照。
- 2) 1990年代に入って、それ以前に書かれた小説『広告のない町』など数編が公表された。
- 3) カダレ作品のフランス語訳の大部分はユスフ・ヴリオニ（Jusuf Vriani 1916－2001）による。戦前アルバニアの首相を父に持つ彼は、労働党時代には政治犯として国内流刑状態にあり、フランス語の翻訳で生計を立てていた。ヴリオニが表舞台に姿を現したのは労働党体制崩壊後の1990年代に入ってからである。なお刊行当時のフランス語圏での評価についてはJaka（1978）参照。
- 4) 「全集」収録分を含む。カダレの全集はアルバニアで2回、フランスで1回刊行されている。なおフランス版全集はアルバニア語オリジナルとフランス語訳で各巻2種類ずつ発売されている。
- 5) これまでに5作が邦訳されているが、いずれもフランス語版からの重訳。拙稿（井浦2008）訳注9参照。

- 6) アルバニアに伝わる復讐の因習を描いた『砕かれた四月』は、舞台を現代ブラジルに移して映画化されている（「ビハインド・ザ・サン」ウォルター・サレス監督、ロドリゴ・サントロ主演、2001年）。
- 7) ただし（しばしば誤解されがちだが）そうした「鎖国」時代でも米ソ両国を除く多くの国々とは国交があり、首都ティラナには各国の大使館や領事館も存在した。
- 8) 『死者の軍隊の将軍』は1982年にイタリア（Luciano Tovoli監督）で、1989年にはアルバニア（Dhimitër Anagnosti監督）で映画化されている。イタリア版で主役の「将軍」を演じたのは、日本でも「甘い生活」や「ひまわり」で知られるマルチェロ・マストロヤンニ（Marcello Mastroianni）であり、一方ジェラルド・クライン（Gerard Klein）演じる「中将」はドイツ語を喋っている。
- 9) 以下、本論文における訳は全て拙訳である。翻訳に当たっては、カダレ自身が「最終決定版」とするフランスのArthème Fayard社版『全集』第6巻（1998年刊）所収のテキストを用いた。全集がアルバニア語版とフランス語版で同時刊行されており、このフランス語版も参照した。フランス語版との間に相違が見られる場合には、アルバニア語版の記述を優先している。入手可能な複数の旧版もできる限り参照した。
- 10) アルプス型は白色人種（コーカソイド）に属し、中背で丸く短い頭蓋が特徴とされる。
- 11) 自主防衛路線を掲げるエンヴェル・ホジャの下で、全土に無数の半球形トーチカが設置された。その多くは撤去に至らぬまま、現在もアルバニア各地に死んだコンクリートのキノコのように残っている。
- 12) ただし、アフリカ駐留時に届いた祖国の雑誌にはアルバニアの風光明媚さを謳う記事が載っており、将軍自身も一度は現地を訪れてみたいと思っていたと述べている。
- 13) つぎ当てだらけの大きなマントを羽織った黒づくめの管理人は、ギリシア神話に登場する冥府の河の渡し人「カロン」に喩えられている。ヨーロッパの神話伝説に対するカダレの深い造詣は、デビュー作でもこうして随所に顔を出している。
- 14) 前述の通り、この後アルバニアは宗教を全面禁止し、世界でも例のない「無神国家」宣言をすることになるのだが、この作品の時代にはまだ宗教活動が（当局の管理下で）辛うじて存続していた。アルバニアはオスマン帝政期に多数がムスリムに改宗したが、もともとはキリスト教徒が多く、現在も人口の3割程度はカトリックないし正教徒である。またムスリムも全般に世俗的で、禁酒や断食などの戒律は極めてゆるい。
- 15) 現在の版では、第二次世界大戦で占領軍と一人で戦って死んだニク・マルティニ（Nik Martini）なる人物のエピソードが語られているのだが、1970年代以前の旧版には、ジェルジ・エレズ・アリア（Gjergj Elez Alia）という伝説上の英雄に関する記述も見られる。ジェルジは戦いで深手を負い、9年間も家で伏せていた。誰もがその存在を忘れていたが、枕元で妹の流した涙に目覚めて立ち上がり、海から姿を現した新たな敵と戦い、勝利の後に死んで葬られたという（Elsie 2001, 101）。アルバニアではよく知られた伝説の一つだが、なぜカダレがこの記述を新版で削除したのかは今のところ不明である。
- 16) この出来事はカダレの郷里ジロカスタルでの戦時中の実話にもとづいているらしく、本作の後に書かれた自伝的小説『石の記録』にも、この娼婦にまつわるエピソードが出てくる。
- 17) この作業員の名は、以前の諸版ではレイズ（Reiz）、或いは名前が明らかにされていない。現在の版ではジョレカ（Gjolleka）となっている。
- 18) 旧版ではこの後に続けて、「彼が戦没者墓地に葬ってもらえるよう、党の委員会に電報を打とう」というやりとりがあったが、現在の版では削除されている。
- 19) この兵士は粉挽き小屋に住み込むことになり、その娘に恋をしたが、やがて彼女は隣村に嫁いでしまう。これは『死者の軍隊の将軍』の中でも有名な箇所の一つだが、アルバニアで映画化された際には、将軍の妄想の中で身元不明の兵士が司祭と同じ顔をしているという、面白い脚色が見られる。ちなみに実際のところ、イタリアの無条件降伏（1943年9月）後もアルバニアには約2万人のイタリア兵が残留していたという。
- 20) それ以上の事情は作中で述べられていない。おそらくこの脱走兵は日記の最終ページを書いた直後、Z大佐率いる「青の部隊」に見つかり、処刑されたのであろうという将軍の想像を示すに留まっている。
- 21) 私事ながら、筆者も例外ではなかった。
- 22) こうした構成は、後のカダレの作品で頻繁に目にすることができる。『死者の軍隊の将軍』でも、各章の間に「番号のない章」と称して、断片的な記述や、登場人物の誰かの発話、或いは全く別の時系列の出来事が不規則に散りばめられている。

- 23) 他の旧「東欧」諸国とは異なり、労働党体制下のアルバニアでは「反体制組織」や「議会外野党」の類がほとんど育たなかった。そのため90年代の変革は労働党内の改革派（アルバニア社会党 中道左派）と、そこから生まれた新党（アルバニア民主党 中道右派）によって主に担われることになった。
- 24) 解放後のアルバニアから見たイタリアとドイツは旧枢軸国であり、一応「敗戦国」である。

参 考 文 献

- Çaushti, Tefik; *Kadare. Fjalor i personazheve*. Tiranë, Enciklopedike, 1995.
- Elsie, Robert; *Dictionary of Albanian literature*. N.Y., Greenwood, 1986.
- Elsie, Robert; *A Dictionary of Albanian Religion, Mythology, and Folk Culture*. N.Y., New York Univ. Press, 2001.
- Hasani, Hasan; *Leksikoni i shkrimtarëve shqiptarë 1501-2001*. Prishtinë, Faik Konica, 2003.
- Jaka, Ymer; *Lidhjet letrare shqiptaro-frënge*. Prishtinë (Kosova), Rilindja, 1978.
- Kadare, Ismail (transl. by Oda Buchholz & Wilfried Fiedler); *Der General der toten Armee*. Kiel, Neuer Malik, 1988.
- Kadare, Ismail; *Vepra 6*. Paris, Fayard, 1998.
- Kadaré, Ismail; *Œvres complètes 6*. Paris, Fayard, 1998.
- Kadare, Ismail; *Vepra 2*. Tiranë, Onufri, 2007.
- Kadare, Ismail (transl. by Derek Coltman); *The General of the Dead Army*. London, Vintage Books, 2008.
- Kuçuku, Bashkim; *Kadare në gjuhët e botës*. Tiranë, Onufri, 2006.
- Pipa, Arshi; *Contemporary Albanian literature*. N.Y., Columbia Univ. Press, 1991.
- 井浦伊知郎「バルカン歴史教科書の比較研究：アルバニア近代史の場合」『広島文教女子大学紀要』41号，2006，101-115.
- 井浦伊知郎「南東欧現代史副教材におけるアルバニアとアルバニア人——CDRSEEワークブックに見る多面的アプローチ——」『広島文教女子大学紀要』42号，2007，83-98.
- 井浦伊知郎「「トロイアの木馬」異聞——イスMAIL・カダレ『怪物』におけるホメーロス解釈——」『広島文教女子大学紀要』43号，2008，81-95.
- 井浦伊知郎『アルバニアインターナショナル』社会評論社，2009.

—平成21年10月29日 受理—